

「底が突き抜けた」時代の歩き方 321

父親になるには命懸けでなければならない - 映画『海辺の家』

映画『父よ』で、命懸けでなければ父親になることはできないとつくづく感じたが、映画『海辺の家』は文字通り、余命いくばくもない男が離婚して別れた息子の父親としての役割を果たそうとする映画である。上の息子が銃殺され、下の息子が死刑囚として投獄されることによって初めて、どこにいるかわからなかった父親が自分の全存在を挙げて息子の救出に立ち向かう『父よ』と同様に、『海辺の家』もまた、自分の命があと数ヶ月とわかって初めて、疎遠なままであった一人息子と共に父親として残りのわずかな時間を過ごそうとする。二つの作品に共通するのは、『父よ』では死刑囚として息子の命が断たれようとすることによって、『海辺の家』では癌で父親の命が断たれようすることによって、共にそれまでないがしろにしてきた父親になろうとしていることだ。

これらの映画が偶然にも映しだしているのは、家族の中の父親賛美なんかではなく、逆に父親になろうとする事の至難振りだ。考えてもみるがよい。息子が死刑囚にでもなるか、父親が癌にでもならなければ、要するに、父と子の一方が命の危険に晒されなければ、偉大な父親として登場することはできないということを描きだしているかのようにみえるからだ。いうまでもなく大半の家族では父は癌になどかからずに長生きするだろうし、親のいうことを聞かない不肖の息子にしても死刑囚になるほどの犯罪にかかわるわけではない。つまり、ここで父親としての役割を果たさなければ、もう永遠に父親になることはできないという決定的な場面など訪れることもなく、父親は相変わらずの父親として過ごし、子供のほうもそんな同居人に等しい父親の存在にそれほど反発することなく、適当に遣り過ごす日常生活を送っているということだ。到底映画になるほどの大きな波乱に見舞われそうにないのである。

家族の関係は性を基軸とする自然の共同性にほかならないとしても、家族それ自体は人工物であるが故に、家族を維持しようと努めなければたちまち崩壊に瀕する。父親は父親としての役割を果たし、母親は母親としての役割を果たし、子供は子供としての役割を果たしさえするなら、家族はうまく維持されていくように思われるけれども、それは家族の固有の輪郭が鮮明であるときだ。しかし、現代は国家の輪郭が溶解しつつあるように、家族の輪郭も溶解しつつある時代である。父親も母親も子供もそれぞれの輪郭を維持しえなくなっているから、家族の中で父親、母親、子供にとってのそれぞれの役割もみえなくなっており、書き割りのように父親が過剰に自分の役割を果たしていこうとするなら、そこにどうしても自己欺瞞が入り込んでくるし、自己演技を免れえなくなってしまう。もしそれぞれができるだけ家族の中で自然に振舞おうとするなら、家族は確実に崩壊していく。

『父よ』の家族も、『海辺の家』の家族もバラバラであった。『父よ』の家族は一緒に暮

らしているようにみえても、それぞれの顔の向きが異なっている点でバラバラであったし、『海辺の家』の家族は離婚によってバラバラになっていた。おそらく家族として生きなければならない主題の喪失にあっては、経済的な紐帯の占める比重が大きく、平穩に過ぎていく日常生活の中では家族としての内容も力量も問われることなく、もちろん鍛えられる機会もなかった。要するに、家族は自然に依拠した人工物にほかならないのに、自然のように過ごす感覚でそれぞれが対応するようになってしまった。人工物だから、もちろん家族も壊れる。家族が解体の危機に瀕するとき、解体するに任せるか、それとも解体しないようにそれぞれが努力するか、そこが家族にとっての分かれ目であった。つまり、解体しても悔いが残らないような家族か、それともけっして解体してはならないと踏ん張ってみせるような家族か、のいずれかであった。

『父よ』も『海辺の家』も、父親がバラバラになっている家族を再生しようとする映画ではなく、息子の前に初めて父親としての力のある姿を現そうとする映画であった。息子が死刑に処せられるのを父親として黙ってみているわけにはいかないという思いであったし、一人息子に父親として何も伝えずにこのまま黙って死んでいくわけにはいかないという思いであった。そこには家族がバラバラであろうが、崩壊していようが、真正面から息子に向き合おうとする姿勢が鮮烈であった。だが先にも書いたように、その父親としての姿勢は息子の命が危なくなるか、自分の命が危なくなるか、という絶体絶命の状態においてしか立ち上がってこなかった。絶体絶命の状況でなくとも、子供たちが二者択一の方向を迫られる岐路に立たされている場合にも父親が力強く隆起してくることは不可欠なのだが、日常の中で隠れている父親が大きな力を発揮するようになるには、どうしてもいざという非日常的な場面に立たされ、追い込まれなくてはならなくなっているのだ。

それほど日常の中に埋もれている父親をその中から引きずりだしてくるのは、大層なことなのである。もっとも日常の中に埋もれたまま二度と姿をみせなくなる父親のほうが多いであろうが、そのなかで『父よ』や『海辺の家』で描かれている父親のように、最後の瞬間には父親としての大きな力を発揮してくる父親たちと、そうでない父親たちとを分かつものは一体何なのか。同じように日常の中に埋没しているようにみえても、よく目を凝らすと、映画の父親たちは心の底では埋没していないのがみえる筈だ。本当に埋没してしまっていたなら、最後の事態であろうとなんであろうと、立ち上がってくることは不可能に思える。足腰が立たなくなっているからだ。実話である『父よ』の父親について、まず問うてみる。

父親がプロの賭博師であったという点に問いの答えは集約されているようにみえる。賭博を稼業とすることはサラリ・マンと異なって、勝負の度毎に大きな緊張を強いられ、時にはトラブルに巻き込まれることもあっただろう。要するに、裏稼業だからある意味で命懸けであった。したがって、日常に埋没していたから息子たちのやることに口を出さなかったのではなく、裏稼業に通じる人生を長く生きていたからこそ、息子たちがかわっているヤバイ仕事にも口出ししなかったのである。もうガキなんかじゃないから、ということで敢えて放任していた。自分が放任されてきたようにだ。しかし、父親は放

任しっ放しではなく、自分が登場しなければならない出番があることを予期していたし、その心構えを常に準備していた。賭博で長年飯を食い、人生を博打のようにみなしてきた男が息子の人生に対して一生の大勝負に打って出ない筈がなかった。放任の結果、上の息子は銃殺され、下の息子は死刑囚として投獄されているという事態の前で、父親としての後悔は十分頂点に達していただろうから尚更であった。

では、『海辺の家』の父親はどうなんだろう。まずストーリーをみておこう。

42歳の建築家ジョージ・モンロー（ケビン・クライン）はCG全盛のこの時代にコンピューターに背を向けて、ひたすら手作りの建築模型で仕事を続けてきた。彼には別れて再婚している元妻ロビン（クリスティン・スコット＝トーマス）と16歳の息子サム（ヘイデン・クリステンセン）がいるが、暴力的な父親に育てられたせいか、家族に自分の生き方を押しつけるようにして生きてきたジョージに我慢できずに、二人とも10年前に彼の元を去っていた。

ある日、ジョージは時代遅れを理由に20年間勤めてきた建築事務所をいきなり解雇される。激怒した彼は事務所に並べていた自分のこれまでの建築物のモデルをすべて鉄棒で叩き壊し、事務所を飛び出す。路上で突然倒れて意識を失う。かつぎこまれた病院で医者から残りわずか3ヶ月の命だと宣告される。この限られた3ヶ月の間に何がしたいか、何が出来るかが、ジョージにとっての最後の生きる課題であり、彼は早速行動し始める。数日後、ジョージを心配したロビンがやってきたとき、彼は息子と共に今の家を建て直すことを宣言する。しかし、20年来この話を聞いてきた彼女は彼の話に全くとり合おうとしない。

ジョージはぐれてロビンの再婚相手ともうまくいっていない息子を、ロビンの家から強引に連れ出す。仲間と女の子をナンパして楽しくやろうという魂胆で、夏休みは夕湖にある友達の別荘へ行く計画を立てていた息子は父親の強引さに腹を立て反発するが、「おまえがどう思おうと、この夏休みは俺と過ごすんだ。ドラッグ、マリファナ、それから顎に付けたピアスも外すんだ。化粧もな。憎むなら、憎んでくれ。ずっと俺も父親を憎んでいたんだ。我家の伝統だ……」といい放つ。息子はこの夏を父親と過ごすことに渋々同意する。父親は息子に今住んでいる海辺のあばら屋を取り壊して、「夢の家」を造るという計画を打ち明け、馬鹿々々しいアイデアだと聞き流している息子の前で、自分の病気を隠したまま、古い家の取り壊し作業を始める。

トイレもシャワーもなく、コンピューターもないのでメールも出来ない環境にうんざりしている息子はガレージ暮らしを余儀なくされているために、向かいの家に住む幼なじみの娘アリッサを通じてシャワー浴びに通い始め、しだいに打ち解けていく。息子には仕事を強要せずに、病んだ身体を押し黙々と父親はあばら屋を壊していく。息子を心配したロビンが様子を見にやって来、思い出の家が取り壊されていく光景に出会って、「一緒に住んだ6年間、辛かったのは2年だけ - あなたに夢中だった1年と、愛が冷えた最後の1年よ」と、短かった結婚生活を振り返り、取り壊しを手伝う。「家を壊そう。ぶっ壊すんだ。父親がくれたこの家を25年間、憎んできた。そして自分自身をもね。しかし、それも今日限りだ - お前に、誇れるものを残したい」、そう語る父親の

姿を見て、ドラッグを買うお金欲しさから息子は、1時間につき10ドルの時給で手伝うことに同意する。

動機は不純であっても、一緒に汗して家を壊すことで親子のこれまでのわだかまりも薄れていき、父は息子の働く姿を嬉しそうに眺め、息子は父を信頼するようになっていく。ロビンも今の夫との幼い子供たちを連れて通い始める。向かいの家のアリッサと母親も何かと手助けをしてくれ、作業が順調に進んでいく中、ジョージの容態は日を追って悪化してゆき、遂に彼はロビンにもうすぐ死ぬことを打ち明ける。母親の動揺した態度から息子も父親の病を知り、父親が最後にやりたいことのために自分を利用したと聞いて怒り、作業から離れていくが、父親のいないアリッサからいつまで拗ねているのといわれて、病院に担ぎ込まれて父親のいなくなった作業現場に戻る。息子のサムをめぐって今の夫ともうまくいってなかったロビンも、昔と変わったジョージに惹かれつつある自分に気づいたジョージから手伝いに来ないほうがいいといわれ、いまの結婚生活を見直していく中、今の夫も作業に参加するようになり、近所の人々の協力もあって、ジョージの死後、家は完成していく。

最後に人生の帳尻がうまく合って、よかったネと半分皮肉をこめていいたくなるような一応ハッピーな映画ではあるが、父親が死を突き迫られなければ、別れた息子と一緒に家を建て直そうとする思いは思いのまま、たぶん現実のものとなることはなかった。そう考えると、父親になろうとすることはどうしても死と引き換えにせずには成り立たないように思われてくる。自分の死を意識することによって、ジョージは息子と共に今の家を建て直したいという年来の望みを成就する行動に飛び込めたからだ。いうまでもなく人は家族の中で生きるだけでなく、家族の外でも生きる。映画の主人公のように、もし自分があと数ヶ月の命であることを知ったとき、自分が最後にやりたいことは、やらねばならないことは、家族の中に埋もれているのだろうか、家族の外に見出しえないものなのか。

たぶん死を前に心残りの一つ一つを消去していくと、最後に残るものは家族という場所に行き着くにちがいない。理由として二つのことが考えられる。一つは、我々が生まれてくるのは家族という場所であって、死んでいくのも家族という場所であることは間違いないからだ。人は生まれてきた場所にむかって死んでいくものなのである。もう一つは、家族の外では誰でも自分のスペアは利くけれども、家族の中ではスペアは利かないからだ。父親や母親の代わりを誰もすることができないし、子供の代わりも誰もできない。夫と妻の関係も同じことがいえる。死刑囚の息子を自分の命を懸けて救出しようとする人間が家族の外からやってくる筈がないし、自分の命があとわずかというときに、死んでいく自分は構わないとしても、家族の中の父親として死んでいくことにはどうしても悔いが無限に残っていくのである。

人の死は自分自身の死、家族の中の死、社会の中の死という三つの位相をとって見舞ってくるが、前述したように、社会の中の死はスペアが利くので悔いは多くはない。自分自身の死も悔いは多くあっても、すべて自分の中に解消することができるので、灰になって消えていく。だが家族の中の死だけは、悔いは家族の関係に突き刺さったままで

ある。子供は親に対して悔いを持たないだろうけれども、親は子供に対して常に悔いを残して止まない。自分たちが子供を生んでしまったこと責任をどう取ればよいのかわからないからである。親でも母親は子供の前にいつでも実在しているので、後悔は必ず具体性を帯びてやってくるけれども、子供の前で実在できない父親の後悔は常に観念性を帯びている。

ジョージにとって20年間勤めてきた建築家の仕事は解雇されたばかりということもあって、残りの命と交換しても構わないような大きなことではなかった。彼がずっと残していると感じつづけていたのは、別れた息子に対する父親としての役割であった。独り身の彼に死んでも死に切れない思いがあるとすれば、唯一そのことであった。6歳で別れて母親の再婚先に一緒に連れて行かれた息子には、父親はどこにもいなかった。命があとわずかという瀬戸際に立たされたジョージがそれまでの自分の人生を内省して振り返ったときに、取り返しのつかないことをしたという後悔に苛まれる最大の相手は、自分たちの離婚が原因で別れた息子にほかならなかった。妻は別の相手と新しい生活に踏み出していたが、息子だけは別れたこの10年間、身近な者のどのような影響を被ることもなく、この先どうやって生きていけばいいのかわからぬまま、ずっと佇んでいたからだ。

孤児に等しい息子と血がつながっているというだけの親子関係に、躍動感に富んだ、本当の生きた温かい血を通そうとするのが父親の最後にして最大の願いであった。その願いは親の代から住みつづけてきた今の家をぶっ壊して、息子と共に新しく建て直したいというずっと抱きつづけてきた夢の実現であった。その夢には一体、どのような意味が詰まっていたのか。ジョージはこの家で暴力的な父親に育てられてきて、自分もまた、父親の専制を踏襲するように家族に自分の生き方を押しつけてきた。その結果、妻からも一人息子からも見放されて、悔いを貯め込むようなところに自分を押し込んでしまった。そのような袋小路から何度も抜け出そうとしてきたが叶わず、とうとう自分の死の直前にまで追い詰められて、この家から自分を解放すると共に、息子と共に建て直した新しい家の中に父親として息子と共に生きた証と記憶をみなぎらせようとしたのだ。

息子と共に新しく家を建て直そうとするこの事業は、ジョージが建築家でもあるという仕事と深くかかわっていた。彼はこれまで数えきれないほど他人の家の建築にかかわってきただろうけれども、自分の家の建築には一度も着手しなかったのである。いや、着手できなかったのだ。彼が自分の住んでいる今の家を新しく建て直すということはしたがって、建築家にとっての最後の、しかも本当の意味での初めての仕事にほかならなかったといえる。なぜなら、彼はこれまでの建築物のような単なる居住空間ではなく、暴力的な父親の専制を憎むながらも踏襲してきたこれまでの自分の生き方と訣別し、息子と共に住むことのできる新たな生き方を目指す生活空間を構築しようとしていたからだ。その変化はこの世からの別れの挨拶を交わすように、体の衰弱していくジョージが息子だけでなく、周りの人たちにも「ハグしよう」といって、愛情を持って抱きしめようとするシーンにあらわされている。

さて、もう一度（何度も）繰り返すが、この映画は父親が死んでいく悲しい物語であ

りながら、父親の望み通りに息子と共に家が新しく建て直されていくハッピーな、肌と心のぬくもりがちらに伝わってくるような作品なんぞではない。映画『父よ』と同様に父親のあり方を考えると、どうしても映画で描写されなかった全く逆の展開が脳裏にしつこく浮かび上がってくるのだ。息子が死刑囚として投獄されなければ、そして父親があとわずかの命と宣告されなければ、もちろん、力強い父親の偉大な姿が発揮される機会はなかったし、したがって映画も成立しなかった。だが我々は映画になりそうにもない、起伏の乏しい平坦な日常生活の中で父親の振りをし、演じているのである。死刑囚になる前の息子や、一緒に家を建て直す前の息子から軽んじられ、煙たがられている映画の中の父親たちとほとんど変わらない父親として普通に生きているのだ。

この土壇場で父親として起ち上がらなければ、もう二度と父親としての役割を果たすことができないような決定的な場面に直面しないと、父親のあるべき姿は引きずりだされてこないのだろうか。そのような決定的な場面に直面しなければ、父親というものは遂に父親に成り損ねたままくすぶりつづけるだけのことなのだろうか。前にも問うたが、決定的な場面に直面することになったからといって、誰もが映画の父親のように感動的に振舞えるわけではないが、それにしても決定的な場面と平坦な日常生活との落差があまりにも大きすぎて一瞬目が眩んでしまうのだ。大きな悲劇に見舞われなければ父親になる機会はないとするなら、父親というのはやはり哀しく、その上に滑稽という二文字も付け加えなければならないのではないか。

韓国で170万部の驚異的ベストセラー（日本版は5万5千部）となり、映画化も予定されている小説『カシコギ』は、`わが子を救えるなら、俺の命をやってもいい`と願う父親の物語である。白血病に冒された息子を抱える詩人である父親は妻に逃げられ、失業中の身で命を救うための骨髄移植の費用など捻り出せず、遂に自分の臓器（臓器）を売って金を作ることを決断し、子供の手術は成功する。しかし自分の生命は風前の灯火というストーリーだが、ベストセラーの背景には日本同様、IMF危機といわれる経済不況に陥っている韓国で、儒教思想の色濃い伝統的な家族秩序の中心的な家長として振舞ってきた父親がリストラで失業したため、家長としての権威を失墜してしまうという事態の頻出が考えられる。

この小説の父親も自分の生命を息子のためになげうつことによって、父親としての存在価値を前面に押し出そうとする。母親も当然子供を守るけれども、母親は常に傍にいて守ろうとするのに対して、父親は少し離れて、ここぞ！と思うところで身を挺して飛び込もうとする。そんなイメージが映画や小説から得られる。母子一体化のような父子一体化の体験を持たない父親は子供から少し離れた場所にいるが故に、いつでも子供のいる場所に飛び込む態勢をかたちづくっておかなくてはならない存在なのだろう。つまり、父親とは平時からいつでも飛び込む態勢を取っている存在であって、その飛び込む中にしか一体化の幻想を育めないのだ。その点が離れていても子供と一緒にいる感覚を持ちうる母親と異なるような気がする。

2002年8月15日記